厚生労働行政推進調査事業費補助金
（難治性疾患等政策研究事業（免疫アレルギー疾患等政策研究事業
（免疫アレルギー疾患政策研究分野））
分担研究報告書

家族の喫煙が肺機能や血清 IgE 値に与える影響に関する研究

研究分担者　小児気管支喘息・アレルギー性鼻炎調査グループ
小田嶋　博　国立病院機構福岡病院　副院長

研究協力者　村上洋子、田場直彦、岩田実穂子、若槻雅敏、川野聖明、沖　剛、
岡部公樹、松崎寛司、本村知華子、本荘　哲、
（国立病院機構福岡病院小児科）

研究要旨
近年、日本では喫煙率が急速に低下してきている。また、喫煙は小児アレルギー疾患に増悪因子として働くことは知られている。実際に小児アレルギー疾患の有症率は喫煙の影響を受けるとの報告は多いが、検査所見にはどのような影響を与えるのであろうか。今回は福岡市での疫学調査から上記の点について検討し若干の興味ある結果を得たので報告する。

A. 研究目的

喫煙はアレルギー疾患の有症率、重症度などに影響する。しかし、検査結果に対する影響に関しての報告は必ずしも多くない。この点について明らかにする。

B. 研究方法

対象は福岡市の５小学校の児童で、問診票によって、喘息及び喘鳴と診断された児。問診票で家族の喫煙の有無、また、夫々の喫煙本数を尋ねた。チェスト社製 HI801 によってフローボリューム曲線を小児アレルギーの専門医が測定した。また血清ＩｇＥ、ダニ特異的ＩｇＥを測定した。対象を男児、女子、高学年、低学年に分けて比較検討した。

（倫理面への配慮）
本研究は国立病院機構福岡病院倫理委員会の承認を得て行った。

C. 研究結果

総数 415 名中、男児 243、女児 166、不明 6、低学年は 253、高学年 162 だった。

全例では、喫煙者がいると男女とも％Ｖ25 が低値を示した。

喫煙者がいるといない場合に比べと全例ではＩｇＥ、ダニ特異的ＩｇＥは差が見られなかった。次に喫煙総数で１日 9 本までと 10 本以上に分けると 10 本以上では、男女ともＩｇＥ、ダニ特異的ＩｇＥは、10 本以上で高値を示した。

D. 考察

家族に喫煙者がいる場合には、末梢気道の指標の低下、及び特異的ＩｇＥ抗体値が上昇しやすくなる傾向があった。喫煙率が低下してきているが、なお、受動喫煙に注意が必要で、1 日 10 本以上では特に早急に禁煙の努力が必要である。

E. 結論

受動喫煙は肺機能、ＩｇＥ抗体に影響する可能性がある。

F. 健康危険情報

さらなる受動喫煙防止が必要。

G. 研究発表予定

なし

H. 財産権の出願・登録状況

なし